

第2節 広島文教女子大学教育学会への参加

1. 研究の道へ

初等教育学科に入学すると同時に、学科が母体である広島文教女子大学教育学会の会員となる。それは即ち、研究の道を歩み始めることである。

大学において精力的になされる研究。それは、一般的な意味での学習と、どのように違うのであろうか。ポピュラーな辞書である『広辞苑』（第五版）を手がかりにしてまとめると、次のようになる。

学 習	研 究
過去の経験の上に立って、新しい知識や技術 ^を 習得すること。	よく調べて、考え、 <u>真理を究める</u> こと。
※上のキーワード（下線部）の語義 知識…知られている内容。認識によって得られた成果。厳密な意味では、原理的・統一的に組織づけられ、客観的妥	※上のキーワード（下線部）の語義 真理…ほんとうのこと。まことの心理。真理認識の方式にはおよそ三つの立場がある。

<p>当性を要求し得る判断の体系。 技術…科学を実地に応用して自然の事物を 改変・加工し、人間生活に役立てること。 習得…習って会得すること。</p> <p>※岡の補説。 上記の「知識」の語義三番目の「厳密な意味では、原理的・統一的に組織づけられ、客観的妥当性を要求し得る判断の体系。」は、かなり研究の概念と似ている。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 観念（認識する知性）と実在との合致によって真が成立すると考える対応説（correspondance theory）。 2. 当の概念が整合的な観念体系の内部で整合するときに真が成立すると考える整合説（coherence theory）。 3. 仮説が事実によって検証されたときに真が成立すると考える実用主義（pragmatism）。 <p>究める…深く追究して物事の本質と真相をつかむ。</p>
---	--

広島文教女子大学教育学会は、教育に関する研究をすることを、主たる使命としている。（全般的なことは、会員に毎年配付される「広島文教教育」誌の最終ページにある「広島文教女子大学教育学会規約」を参照のこと。）その教育に関する研究とは、まさに上記の意味での研究そのものである。

学生諸君の研究は、最終的には卒業研究という形で結実する。卒業研究では、卒業演奏や卒業制作を伴う場合もあるが、4年間の学びの集大成として、誰もが卒業論文を完成させる。もちろん研究論文である。だから、学会誌「広島文教教育」には、必ず「卒業論文題目一覧」が載せられる。

2. 広島文教女子大学教育学会の概要

では、ここで、本学会の創設から本格的な活動に移るまでのことについて、ざっと紹介しておくことにする。

広島文教女子大学の、当時の文学部において、初等教育学科は、実践力のある女教師の育成をめざし、昭和56年（1981年）4月に開設された。そこで、児童期の教育方法を科学的に追究するという目標を達成するために、次のような目的をもって、本学会の組織がつくられた。

- (1) 初等教育学科所属教員の教育研究の一層の促進を図る。
- (2) 卒業生の小学校教育現場における実践的研究のための資料や情報の提供と研究発表の場とする。
- (3) 卒業生相互、大学と卒業生との連携の場とする。

その(1)については、教員（OBも含む）だけでなく、当然のことながら、本学大学院の院生・本学科の学生及び修生・卒業生、そして学外から賛同し

て学会員となられた方々にも、研究発表や学会誌への投稿の門戸が開かれている。

ここで、研究大会について触れておくことにする。学会設立から若干の準備期間を経て、昭和60年（1985年）より毎年、春には定期総会、秋には研究発表大会が開催されることとなり、現在に至っている。平成21年の段階で、両会とも25回を数えている。

途中、短期大学部幼児教育学科が発展解消され、初等教育学科に吸収統合されたことにより、幼児教育研究の部門も加わり、学会活動が益々充実してきていることは言うまでもない。

さらに、学会誌であるが、昭和61年（1986年）に、「広島文教教育」が創刊され、以来、本学会の重要な研究事業として継続されている。平成21年度には、第24巻を発行するにいった。

そして、学会の会員状況であるが、平成21年度現在で、卒業生・修了生、在学生・在院生、それに教員を加えて、全体で約2,000名強となっている。

具体的に紹介することも大事であるから、アーカイブスということで、平成17年度の模様をお伝えしてみたい。

年度当初は、定期総会から始まる。日時は平成17年5月27日（金）の13時10分より14時40分まで、会場は大講義室（本学2号館2階）にて、内容は平成16年度活動報告、平成16年度決算報告・監査報告、平成17年度役員選出、平成17年度活動方針（第21回定期総会の開催、第21回研究発表大会の開催、「広島文教教育」第20巻の発行、「初教かわらばん」第7号の発行、教育学会文庫の充実ほか）、平成17年度予算案などであった。最後は、講演である。「文章は頭で書くな、足で書け 私の職業経験の中から」と題して、碓井 巧先生（当時本学教授・人間文化学科学科長・元中国新聞論説主幹）より、興味深いお話をお聞きすることができた。

秋を迎えると、研究発表大会がやってくる。日時は平成17年11月5日（土）の13時より17時まで、会場はやはり大講義室（本学2号館2階）にて、内容は次のようなものであった。（勤務先等は当時のものである。）

(1) 研究・体験発表

「初等教育学科4年間の学び・そして今」

汪 芳（初教20期生・広島県立大学大学院在学）

「結（ゆい）のところでつながって 直くと私の1年6ヶ月」

小村瑞与（初教20期生・広島市立五日市観音小学校勤務）

「子どもと共に ありがとうの気持ち」

田賀陽子（幼教22期生・広島文教女子大学附属幼稚園勤務）

「子どもという存在 先端医療の現場で思うこと」

中田史子（初教16期生／本学大学院16期生・医療法人ハート勤務）

(2) 講演

「花それぞれ、人それぞれ、それぞれに咲く」

梅田健造（比治山大学講師・元広島県公立小学校校長）

(3) 懇親会

年によっては若干内容の変わることもあるが、ほぼこのような形で、春の定期総会・秋の研究発表大会が行われる。在学生にとっても、多様な学びができることがおわかりいただけると思う。研究発表大会の最後は懇親会であるが、これがまた貴重な場であり、先輩から苦労話や在学生への励ましの言葉も聞くことができ、好評である。

また、紙幅の関係で簡単にしか紹介できないが、本学会では、定期刊行誌として、もう一つ、卒業生と在学生をつなぐ「初教かわらばん」というものがあり、人気が高い。これは、本学会のホームページでも読むことができるので、バックナンバーもどうかご覧いただきたい。他には、本学2号館6階の262教室に設置されている「教育学会文庫」の運営も特筆できる。硬軟とりまぜた、読み応えのある本が並んでいる。これも、利用者が徐々に増えており、学会としてもさらに力を入れようと考えている。

本学の新生となり、同時に、学会会員となることは、このようにメリットが大きい。どうか、大いにこのチャンスを生かしてもらいたい。

3. 研究の実際

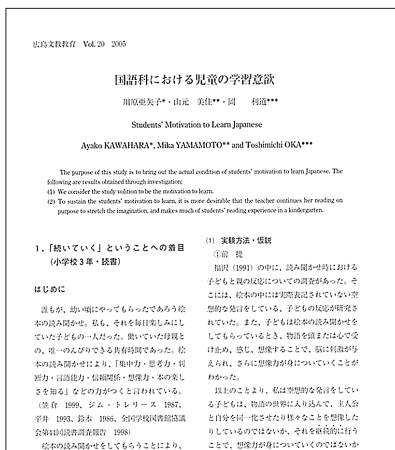
ここでは、児童教育コース・国語専修で学んだ二人の卒業生の例を紹介する。在学中から卒業後にかけて、どのようにして研究の道を歩んでいったのか。その実際を見ていただくことにする。

その二人は、初等教育学科20期生（2004年3月卒）の川原亜矢子氏と、同じく21期生（2005年3月卒）の山元美佳氏である。二人とも国語専修であったことから、ふだんの授業（演習）で、小学校国語科の教育実践について深く学んでいた。教育実習の国語科の授業は、川原氏が文学教材で、山元氏は説明文教材でそれぞれ行っている。そのような体験をふまえ、卒業研究は、川原氏が文学教材（読書教材）を、山元氏が説明文教材をそれぞれ対象としている。他の学生と同様に、その研究を二人も卒業論文としてまとめ、卒業していった。

私は（私だけではなからうが）、ゼミ生全員に対して、自分の卒業論文を学会誌「広島文教教育」に投稿するよう促す心構えをもって指導している。（投稿・執筆の規程に合わせたのちであるが。物理的に、何時もできるわけではない。その気概で研究を進めるよう伝えているところである。）

山元氏が卒業する直前のことであった。私なりの研究構想（当時のものである。児童の国語学習に向かう意欲を高めるための研究をしたいというもの。）に、山元氏の研究内容の主要部分が呼応するゆえ、共同研究（共著）として学会誌「広島文教教育」に投稿しようと働きかけた。その時、山元氏の先輩である川原氏の研究についても同様であり、仲間に加えたい旨を伝えた。山元氏は、その場で快諾してくれた。川原氏からも、ほどなく同様な返事を得た。

かくして三人は、連絡を取り合い、論文を仕上げるにいたった。それは、24



ページにわたる共著研究論文「国語科における児童の学習意欲」として、学会誌「広島文教教育」vol. 20（2006年3月17日発行）に掲載された。詳しくは同論文をお読みいただければわかるので割愛するが、本節の冒頭に触れた「研究」の名に値する内容であったと自負している。

同論文のそれぞれの執筆部分の最後のところで、三人とも「今後の課題」を記した。現在、各自がその課題に取り組んでいる。「機会があれば続編を發表しよう。」との約束を励みとしつつ。

川原氏と山元氏の研究体験は、決して特殊なものではない。一人一人の学生にもなされるチャンスがあるものである。最後に、学生諸君に呼び掛ける。研究の同志として、これからも力強く歩もうではないか、と。

（岡 利道）